

講演会 『ドイツ語になった日本語』

ヴィクトリア
エシュバツハニサボー氏
(テュービンゲン大学日本学科教授)



2013年9月6日(金)15:00-17:30

東京外国語大学留学生日本語教育センター1階 さくらホール
〈一般公開・参加費無料〉

※ 講演は日本語で行われます。お気軽にご参加ください

■講演の概要■

日本列島が西洋と文化的・経済的な接触を得て以来四百年になるが、その関係は敬意、不安、異国情緒、慇懃無礼など多岐にわたって特徴づけられるように様々である。そうした接触は言語接触としても現われ、日本語に多種の外来語が入ったと同時に、日本語から他言語へも数多くの借入語の流入をもたらした。今日それは英語での受容がいちばん多いが、あらゆるヨーロッパ言語においても日本語からの借入語は増加傾向にある。

英語への借入語は、17世紀には古くから流入していた仏教用語6語を含め61語が記録され、それが19世紀には416語、20世紀末には613語が英語の辞典に収められている。語彙総数では1425語となり、アラビア語関係の2338語と比較しても、文化接触期間の短さを考慮すると、注目し得る数である。

ドイツ語その他言語への日本語の影響に関してはテュービンゲン大学の日本言語学研究の一領域であるので、ここでは特にドイツの新聞・雑誌などのメディアを資料に概説を試みる。日本経済ブームやグローバル化を通じて新たに生じた接触を二層に分けると、60年代、70年代の波は日本からヨーロッパへハイテクや伝統文化をもたらし、80年代後半以降はゲーム製品やメディア機器、そして、若者文化を流入させた。それにより広範囲で言語的潜在性が成立したと見ることができ、日本語が商品名として、あるいはコマーシャル上で日常に入り込んできた。

一方で、メディアに提示される「現実」と日常の現実とは相離反していく可能性がある。この現象を、テュービンゲン近郊に住むある虚構の家族を例として、その日常に登場する日本語とその言語要素について考察したい。

対照日本語部門：早津恵美子 鈴木智美 高垣敏博 成田節 三宅登之